

中学校社会科歴史的分野における思考力育成を目指した授業

—理論と実践の接続を意識した「平安時代」の構成—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科分野 石川果歩

1. 問題の所在と研究の目的

社会科と言えば、どんなことをイメージするだろうか。少なくとも、中学生の頃の筆者は、「暗記」「覚える」という教科であると感じていた。現在の中学生と関わる中でも「社会科は覚えなきゃいけないから苦手」という声を聞くことは少なくない。実際、社会科で扱われる事象は膨大であり、その個別的な知識を獲得することに重点を置いた授業に陥りやすいことは指摘され続けている。社会科は、地理的分野・歴史的分野・公民的分野があるが、なかでも中学生の生活経験から離れやすい歴史的分野においてその傾向が強いと感じる。加藤（1982）は「歴史教育は歴史的知識の量的拡大を図るための暗記科目として内容は事項・人物その因果関係などの系統的把握にとどまり、現代に生きるための歴史的思考を育てる方法や内容への配慮が不十分」と述べた。また、池野（2006）は、「現行の歴史教育は、子どもたちに興味のないもの、事実や出来事の記憶や理解を強制するもの、現在の社会と結びつかないもの、学習者である子どもたちに意味のないものになっている」と指摘している。筆者はこのようなことから、学習者が「暗記科目」というイメージを抱かざる得ない状況になっていると考えた。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説では、社会科の目標を「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」としている。つまり、歴史的分野においても、知識の獲得を目的とせず資質・

能力の育成に重きを置く授業が必要である。そこで、「(2)社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。」という思考力・判断力・表現力の部分に注目したい。

今現在、生徒たちが生きている社会は、少子高齢問題、雇用問題、経済格差、環境問題など様々な課題を抱えている。また、情報化、グローバル化、さらなる技術革新も期待され、さらに変化の激しい社会となっていくであろう。このような社会の中で生きていく生徒たちだからこそ、膨大な知識の獲得ではなく、思考力・判断力・表現力を重点的に育成する必要があるのではないだろうか。筆者が社会科で目指したい生徒像は以下のとおりである。

- ・発展や課題の背景や影響を知り、どうしていくべきか考えることができる。
 - ・様々な背景を持った人々の立場になって考えることができる。
 - ・たくさんの情報の中から適切なものを判断し、自分自身の考えをもつことができる。
- 表面上に現れている発展や課題だけを浮き彫りにして解決方法を考えるだけではなく、それがなぜ起こり、どのような背景だったのか、本質的な部分を知ったうえで解決方法を考えることが重要である。そして、生徒自身に歴史認識を形成・発展させることが、歴史的分野の重要な役割の一つであると考えられる。森分（1997）は、「我々は特定の社会的事象についてなにかを知り、わかろうとすると、その事象に対して問いを投げ掛け、あれこれ調べ、仮設と検証を繰り返して答えにたどりつき、そ

れを把握している。この過程が思考である。」としている。歴史認識に必要なのは、ただ教科書を読み、歴史的事象を書かれた通りに覚えることではなく、森分の言う「思考」という科学的な探究であると考え。そしてこの思考する力を育成していくことが歴史の授業で求められているのではないだろうか。

長年、思考力育成の授業については研究がなされている。森分(1982)は、科学的探究の論理に従って学習させることにより、概念的知識の習得を可能にする授業構成を考案した。加藤(2006)は、教え込みの授業ではなく、一定の問題定義に対して生徒それぞれが自分の意見を持ち、討論を通じて各自が自分の歴史認識を発展させる「考える日本史」の授業を実践している。その他さまざまな研究が行われているが、なぜ、未だに知識の獲得に重点を置く授業が指摘され続けているのだろうか。筆者は研究理論と現場での実践がうまく接続できていないことが課題であると考えた。そこで、それを解消できるような授業構成を提示することを目指していきたい。なお、先行研究では、2つの問題があると考え。1つは、付属の学校などの一定の知識をもった生徒を対象としており、一般の公立学校ではそのまま実践するのは難しいこと。2つ目は、生徒たちが生きる「現代」との関わりが少なく、結局は生徒たちが身近に感じられない、意味のないものになってしまうということである。そこで、本研究の目的を次のように設定する。

- (1)一定の歴史知識を持っていない場合でも、歴史認識を形成・発展させるための思考力の育成を目指す授業構成を開発・実践すること
- (2)現代に生きる生徒との関わりを意識した研究理論と現場での実践の接続のあり方を提示すること

2. 研究の方法

上記の問題意識・目的に基づき、本研究は以下の連携協力校における教育実習を通して行った。

- (1)実習校…山梨県内の公立中学校
- (2)対象生徒…第1学年1クラスの生徒23人
- (3)期間…令和2年6月～12月
- (4)具体的な手立て

①参与観察

生徒の様子や現場に立つ教師の思い、カリキュラムの実践的運営など、長期的な現場の実態を知るために行う。朝の会、帰りの会、給食指導、部活指導、学校行事などに参加し、生徒と触れ合いながら、教育活動を行う。その中で気づいたこと、感じたことをフィールドノートに記入し、まとめる。

②単元構想・計画

1時間の単発的な授業ではなく、単元を通して思考力育成を目指す。本研究では、実習校の進行度に合わせ、「平安時代」の単元構想を行い、実践する。まず、単元の構想において注意すべき点を提示する。

- ・小学校までの知識を持った公立学校の生徒が対象であること。
- ・教科書や資料集を極力使い、現場での実践が実際に可能であること
- ・現代に生きる生徒との関わりを意識すること。

単元計画については、森分(1997)の「思考力育成のための基本原則」という先行研究を参考に構想した。思考を導く問いの基本型は、「なぜか(why)」と「どうなるか(then)」「なにか(what)」の3つである。社会的事象に、その生起や状態、変化やそこにみられる問題について、どのようであるかを知って、なぜか、どうなるか、どうするか、なにかと問いかけ、さらに、どうなっているかを詳しく調べながら、考えて答えを見だし、それを把握してゆくことで思考力の育成を目指す授業の手順を本研究でも取り入れた。「思考力育成のための基本原則」については、以下に示す。

「思考力育成のための基本原則」

- ① 「思考の対象」から授業・学習の主題を設定。
- ② 「思考によって明らかにされる、事象についてわかりたいこと」を授業・学習の目標として設定。
- ③ 目標に対応して、「思考を求める問いの基本型」を選択し、子どもが自分の問いとして探求できる形にして学習課題を設定。

思考の対象	思考を求める問いの基本型	答えの内容：思考によって明らかにされる、事象についてわかりたいこと	
社会的事象 または 社会的事象 の 生起 状態 実化 問題 ！ いかに (how)	なぜ (why)	原因、条件、目的 理由	構造
	どうなるか (then)	結果、影響、機能 意義、方策	
	なにか (what)	属性、本質	

授業・学習
の
主題

学習
課題

授業・学習
の
目標

この手順を踏まえた授業計画は以下のとおりである。この計画は 3 時間分の構成であり、単元を通して「今につながる平安時代の文化はどのように生まれたのか」を考えさせることを目標にしている。また、①～③は上記の手順に一致させている。

1 時間目

- ① 「平安時代の文化」
- ② 平安時代の文化にはどんなものがあるのか興味をもち、資料をもとに調べながら理解できる。
- ③ 平安時代の文化は何か知ろう！

2 時間目

- ① 「平安時代の政治・東アジアとのかかわり」
- ② 平安時代の政治や東アジアとの関わりについて理解することができる。
- ③ 平安時代の政治や東アジアとの関わりの特徴は何か知ろう！

3 時間目

- ① 「平安時代の文化の背景」
- ② 平安時代の文化がどんな背景をもって生まれたのか、政治や東アジアとの関わりを意識しながら説明できる。
- ③ 今につながる平安時代の文化がどのようにして生まれたのか説明しよう！

この構成の特徴として、「文化」を軸に進めることで、現代に生きる生徒たちと関わりを意識したことが挙げられる。平安時代に起源がある「かな文字・かな文学」や「真言宗・天台宗などの仏教」は、現在でも使用され、または信仰されている。生徒たちが普段から触れている「文化」について、平安時代の政治や外国との関わりを通して、その生起や原因を探ることで平安時代に対する歴史認識を形成・拡大させていこうと考えた。「文化」はどの時代の単元においても、教科書では最後のページにまとめられることが多い。また、時間が無い場合に、表でまとめるなどして終わってしまうこともある。

「文化」を政治や外交など、他の事象とつなぐことで、一般の公立中学校で現実に行われている政治史中心の単元・内容構成にも配慮しつつ知識だけの注入を防ぐことができると考えたことも言及しておきたい。

③ 授業実践

以上の授業計画を踏まえ、授業実践を行った。授業は筆者がプリント・資料を作成し、それを活用しながら進めていった。

1 時間目は、単元全体の導入であり、基本的な平安時代の「文化」についておさえ、生徒たちに「今につながる文化がなぜ平安時代に生まれたのか」という疑問を持たせる場面である。まず、既習事項である「万葉仮名」と「かな文字」の比較をすることで、現在と歴史をつなぎ、「なぜ平安時代に生まれたのかな」「かな文字が生まれた平安時代ってどんな時代だろう」という発問を投げかけた。そして、平安時代の「文化」はほかにどんな

ものがあるのか、どんな特徴があるのかをおさえるために調べ学習を行った。ここで特徴として捉えさせたいのは、日本独自の文化が生まれたこと、唐の文化を取り入れようとしていること、貴族の文化が多いこと、の3点である。まとめでは、「唐の文化を取り入れようとしているのに、「かな文字」のような日本独自の文化が生まれたのはどうしてだろう」というゆさぶりの発問を投げかけ、次時の政治・外交につなげた。本時の流れと内容は以下のとおりである。(指導案を抜粋)

	学習活動と内容
導入	◎平安時代について知っていることをあげてみよう！ ◇ワークシートに記入する 万葉仮名の文を見せて… ◎この文は何と書いてあるでしょう？ 己呂奈和己和以（万葉仮名） コロナはこわい コロナは怖い ◎万葉仮名と仮名文字では伝わり方にどんな差があるだろう？ ◎こんな便利なかな文字が生まれた平安時代とはどんな時代だったのだろう？ ◎なぜ平安時代に生まれたのだろう？
展開	◇ワークシートに目標を書く。 ◇平安時代の文化について調べる。 ・教科書や資料集、プリント（資料）から、平安時代の文化について班で調べる ◇全体で確認する。 班ごとに調べたものを板書し、全体で確認していく中で、ポイントを抑える。 ・最澄・空海はどこから仏教を学んだのかな？ ・平等院鳳凰堂のような豪華な建物を造ることができるのはどんな人だろう？ ・寝殿造りはだれの家？ ・かな文字はどんな人々が何に使用していたのかな？
まとめ	・なぜ新しい仏教が出てきたの？ ・なぜ唐との交流があったのに日本独自のもの

め	のが生まれたの…？ ・なぜ貴族の文化が多いの？ ◇授業の振り返りを行う
---	---

2時間目は、1時間目の最後の発問を受け、そのヒントとなる政治の特徴や外国との関わりの特徴を学習する場面である。「桓武天皇の政治」「藤原氏の摂関政治」「東アジアとのかかわり」というように、大きく3つに分けて、学習を進めていき、その中でどのように「文化」と関わりがあるのかを確認していった。

	学習活動と内容
導入	◇前回の復習・答え合わせの続き ・なぜ新しい仏教が出てきたの？ ・なぜ唐との交流があったのに日本独自のものが生まれたの…？ ・なぜ貴族の文化が多いの？
展開	◇目標をワークシートに記入する ◎いつからが平安時代だろう？ ◎だれが都を移したのだろう？ ◎なぜ桓武天皇は平安京に都を移したのだろう？ ・その前は？→平城京 ・奈良時代には、仏教の力で国を守り、不安を取り除こうという動きがあった。その中で寺院の勢力が拡大し、政治に介入してきた。 ◎桓武天皇が行った政治の特徴は何だろう？ ・地方政治の立て直し ・東北支配 蝦夷・征夷大將軍（坂上田村麻呂） ・その後の天皇も桓武天皇の政治体制（律令）を引き継いだ。幼い天皇が誕生。 ◎天皇が幼い時はどうしていただろう？ ◎誰に頼んだらいいだろう？ ・藤原氏が摂政になる ◇教科書の家系図を確認する ・摂政と関白という言葉の確認 ・娘を天皇の妃にしている ◎関白って何だろう？

	<ul style="list-style-type: none"> ・天皇が成人した後も政治の補佐をする ・摂関政治の確立 ⇒最盛期は道長・頼道 ・藤原氏の官職独占 ・地方政治の悪化 国司の不正・逃亡農民・班田収授実施困難 ◎他の国々（東アジア）との関わりはどうだったのだろうか？ ・唐の衰退 ・遣唐使の廃止（菅原道真） ・新羅の滅亡・高麗の建国 ・宋との交流
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ◎今日のポイントは何か？ ・桓武天皇の政治 ・藤原氏の摂関政治 ・東アジアとの関わり ・それぞれの文化とのかかわり ◇振り返りシートの記入

3時間目はまとめの授業である。1時間目・2時間目で学習したことを黒板とプリントにまとめ、「文化」「政治」「外交」がどのように関わっているのかを視覚的に理解できるように工夫を行った。表1が授業内で生徒が実際にまとめの際に使用した表である。一番上を単元の軸とした「文化」、真ん中を「政治」、下を「外交」としている。黒板では教師がこのプリントのように表を作り、作成しておいた重要語句を左から右に進む時間の流れに沿って、生徒と確認しながら張り出していく。

表1 授業内で使用したプリント（表）



このまとめは、それぞれの知識をつなぎ、平安時代の大きな流れを掴むことを目的としている。

まとめを終えて、「今につながる平安時代の文化はどのように生まれたのか説明しよう！」という最終課題を提示した。生徒たちの生活経験からイメージしやすい「かな文字・かな文学」と「平安新仏教」について選択してもらい、まとめた表の語句を参考にその説明文を書いていく活動である。例文として「今につながる〇〇は、△△を背景にして生まれた。特に◇◇とかかわりがある」という文を提示して、生徒が説明文でつまづかないよう留意した。

	学習活動と内容
導入	<ul style="list-style-type: none"> ◇前回のポイントをおさえる ・桓武天皇の政治 ・藤原氏の摂関政治 ・東アジアとの関わり ・それぞれの文化とのかかわり
展開	<ul style="list-style-type: none"> ◇ワークシートに目標を書く。 ◇平安時代の文化・政治・東アジアとの関わりについて、図にまとめる ◎文化・政治・東アジアとの関わりにはどんなつながりがありそうかな？ 黒板で確認する
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ◎今につながる平安時代の文化はどのようにして生まれたのだろうか？ ◇説明する文化を決める ・平安新仏教 ・かな文字・かな文学 ◇今につながる〇〇文化は、△△を背景にして生まれた。 ・今につながる平安新仏教は、桓武天皇の政治を背景に生まれた。（特に、平安遷都にかかわりがある） ・かな文字・かな文学は唐の衰退や藤原氏の摂関政治を背景に生まれた。（特に、娘を天皇の后にしたこととかかわりがある） ◇振り返りシート記入

④分析

以上の授業実践の効果を分析するため、予め次の問いを授業の中にセッティングした。まず、1時間目の授業の導入で、短時間ではあるが、生徒に平安時代について知っていることをあげてもらった活動を行った。生徒たちにこれから行われる学習がどのようなものか見通しを持たせるためのものであると同時に、筆者としては、最終課題と比較に使用し、平安時代に対するその認識の変容を見取るためのものであった。その挙げてもらった語句について分析を行った結果、一番多かったのが「藤原道長」の13人、次に多いのが「清少納言」「紫式部」で6人、次いで「源氏物語」が4人、「枕草子」「藤原道長が娘を天皇の后にした」が3人、「かな文字」が2人、「日本の文化ができた」「桓武天皇」「国風文化」「貴族中心」「高麗」が1人ずつおり、無記入が3人であった。全体的にみていくと、小学校の既習事項は比較的小さな状態の生徒たちであるが、断片的な知識であり他の事象と結びつけて考えることはこの段階では見受けられなかった。上位を見ていくと「藤原道長」「清少納言」「紫式部」というように、平安時代のイメージが人物に偏っていることも特徴として挙げられる。

3時間目の最終課題「今につながる平安時代の文化はどのようにして生まれたのだろうか？」については次のような結果が得られた。「かな文字・かな文学」については、出席生徒22人中10人が選択し、表2のように記述した。表3が「平安新仏教」についてであり、22人中10人が選択した。22人中2人は無記入である。

表2 「かな文字・かな文学」

生徒が背景として選んだ事象	
道長・頼道の撰関政治	7人
(天皇の後の教養として紫式部や清少納言が教師を行った。)	(3人)
唐の衰退	2人

(唐の国内での反乱)	(1人)
日本語の発音を表記したこと	1人

表3 「平安新仏教」

生徒が背景として選んだ事象	
遣唐使	3人
平安京遷都	2人
平安京遷都+桓武天皇の政治	〃
桓武天皇の政治	〃
(新しい仏教を学ばせるために僧を中国へ送った)	(1人)
平安京遷都+桓武天皇の政治+遣唐使	1人

「かな文字・かな文学」「平安新仏教」どちらもほとんどの生徒が、その生まれた背景として適切なものを記述できていた。()内は、特に関わりのあることは何かという記述である。「かな文字・かな文学」については「道長・頼道の撰関政治」と記述した7人中3人が、「天皇の後の教養といて紫式部や清少納言が教師を行った」という他の事象と結びつけて考えられていることがわかる。「平安新仏教」については、「平安京遷都」と「桓武天皇の政治」と「遣唐使」というように、1つの事象だけでなく様々な事象の関連性や相互関係について気づいている生徒もいたことがわかる。1時間目の「平安時代に知っていることをあげてみよう」の結果と比較してみると、生徒たちが「文化」の生起を切り口に、平安時代の様々な事象を関連して考えられるようになったのではないかと考える。

最後に、毎時間の振り返りシートについての分析である。最終課題と違うところは、生徒の言葉で書かれている点であり、今につながる「文化」の背景や、「文化」とその他の事象についてわかったこと、感想などを自由に表現できる場となっている。「平安時代にできたかな文字・かな文学は、藤原氏の政治を背景に生まれたことが分かり、

政治と文化には、深いかかわりがあったことも知った」

「平安時代の仏教や文字は今の生活とも根付いていることがわかりました」

「私が感じている当たり前の日常はこのような背景から生まれたのだと知れてとても良かった」

「政治と文化が関わっているなんて思ってもいませんでした」

「かな文字・かな文学・平安新仏教には、いろいろなことを背景にしていたことがわかりました」

「平安時代の政治は東アジアとかかわりがあることがわかりました。摂関政治は平安時代の文学や文化に影響を与えていることを知りました」

「今まで平安時代についてわからなかったけど、授業を聞いて（最終課題が）しっかりかけた」

歴史の授業内で学習したことが、今の生活につながっているということを実感した生徒、事象と事象との関連性を見出した生徒、平安時代について何も書けなかったが、最終課題を通して、平安時代について1つでも書けるようになった生徒がいることがわかった。この振り返りシートからも、単元を通して生徒たちが平安時代についてどのように考えたのかを知ることができた。

3. 結果と考察

本研究の目的と照らし合わせ、その方法は妥当であったか考察していく。

(1)一定の歴史知識を持っていない場合でも、歴史認識を形成・発展させるための思考力の育成を目指す授業構成を開発・実践すること

(2)現代に生きる生徒との関わりを意識した研究理論と現場での実践の接続のあり方を提示すること

(1)に関して、思考力がこの3時間という短い時間で育成されたかどうか見取るには厳しいものがあるが、「平安時代」についての「文化」

を意識した歴史認識は、分析結果を見る限りでは形成・発展されていると断言はできない。また、単元を通して考える問い（「今につながる平安時代の文化はどのようにして生まれたのだろうか」）を設定し、発問し続けることで、生徒が毎時間の学習事項とその関わりを意識しながら1時間目から3時間目まで授業に臨むことができた。1時間の授業の中でも主発問を投げかけ、それに対して教科書や資料集を調べ、確認しながら、一つ一つの歴史事象について把握していった。歴史的事象に対して問いを投げ掛け、あれこれ調べ、仮設と検証を繰り返して答えにたどりつき、それを把握するという思考のプロセスを生徒が経験していくことで、その力がだんだんと身についていくと考える。今回は1単元を通しての長期的な思考、そして1回の授業の中での短期的な思考をすることで、生徒が歴史認識の1つの方法を体験したと言える。これを実際に、どの単元でも行っていくことができれば、歴史教育全体を通じた思考力育成につながっていくと考える。

(2)に関しては、筆者は先行研究を取り入れながらも、現代に生きる生徒たちとの関わりを意識することで今までの課題を解消し、さらに現場で実際に行うことができる形で提示することができたのではないかと考える。「思考力育成の基本原則」を取り入れたことで、授業の組み立てはスムーズに行えたことは事実であるが、この「なぜ」「どうなるか」「なにか」という発問は、教科書にも載っており、ただ使用するだけでは研究理論と現場での実践の正しい接続とはいえないであろう。今までの研究理論を活用し、教師自身が目の前にいる生徒の実態に合わせ、新たなものに作り替えて実践していくことが接続のあり方であると考えられる。本研究では現代に生きる生徒たちと関わりを持たせるため、「文化」を軸にして単元計画を構想するという理論を現場で実践したという1つの接続の方法を提示できたと考えられる。結果としては、2つの目的を達成できるような方法であったのではないだろうか。

4. 課題と展望

3時間目の生徒が説明文を書く場面では、生徒が記述するにあたり、様々な制約をってしまったことに課題を感じる。「かな文字・かな文学」と「平安新仏教」に限定してしまっていることや、その背景についても「まとめたものの語句の中から」という風に限定してしまっていたことに関して、そもそもその2つで妥当であったのか疑問に残る。果たして「平安新仏教」は生徒たちに身近に感じることであるのか、もっと書きたいことがあったのではないかと感じる部分である。また、記述できなかった生徒への支援も考えていくべき事項である。例えば、個人だけではなく、班活動を通して班としての意見を生徒同士で話し合う機会を与えることが考えられる。

「今につながる文化の背景」としての「平安時代」ということで、本単元では比較的生徒たちと関わりのある「文化」が多かった。「文化」は生徒に身近なものほど受け入れられやすく、生徒が興味を持ちやすいものであると考える。しかし、生徒が身近に感じないものの中にはある。教師が生徒の実態をよく把握しておくことも本研究のような単元構成では必要になってくると感じる。平安時代ではなく、縄文時代であったら？鎌倉時代であったら？江戸時代であったら？平安時代だからできた研究とまらないよう他での単元でも可能であるのか、一般の公立中学校における実践の可能性にこだわりつつ、研究を重ねていきたい。

実際に生徒に触れられる現場だからこそ今を生きる生徒たちを見取り、これからを生きるための能力を育成する歴史教育ができるのではないだろうか。

参考文献

- 池野範男「市民社会科教育の授業構成」『社会科研究』第64号, 2006年, pp.51-60
- 加藤章「歴史教育の歴史に学ぶ視点」『歴史教育の歴史』(講座歴史教育第1巻) 弘文堂, 1982年, p.2
- 加藤公明「民主社会の担い手を育てる歴史教育—「考える日本史授業」の実践を通じて—」『社会科研究』第64号, 2006年, pp.31-40
- 中学校学習指導要領【平成29年度告示】社会科編
- 森分孝治「社会科学的概念学習の授業構成(Ⅲ)—「平安時代の時代構造」の教授書試案—」『広島大学教育学部 学部附属共同研究体体制研究紀要』第10号, 1982, pp.35-46
- 森分孝治「社会科における思考力育成の基本原則—形式主義・活動主義的偏向の克服のために—」『社会科研究』第47号, 1997, pp.1-10